

『現象－外 (Hors phénomène)』のための十のテーゼ

エマニュエル・ファルク(鳥尾 理沙・杉村 靖彦訳)

Mémoire : Dix thèses pour Hors phénomène

Emmanuel FALQUE

以下は、私の著作『現象－外 (Hors phénomène)』を十のテーゼにまとめて教育的な仕方で提示した文書である。これは、チェコ共和国・プラハのドミニコ会センターで、ヤン・パトチカの弟子であるチェコの哲学者ミロスラフ・ペトリチェクとの対話の際に発表したものである。

1. 現象－外 (Le Hors phénomène)

何かが起こる、何かが私に起こるというときには、次の三つのことを区別する必要がある。一つ目は、出来事を準備するもの、すなわち現象－下のもの (*l'infra-phénoménal*) であり、フッサールの「意識の流れ」、ハイデガーの「退去 (*retrait*)」、メルロ＝ポンティの「生活世界」がその例となる。二つ目は、出来事を溢れ出るもの、すなわち超－現象的なもの (*le supra-phénoménal*) であり、レヴィナスの「顔 (*visage*)」、ミシェル・アンリの「自己－触発 (*auto-affection*)」、ジャン＝ルイ・クレティアンの「言葉 (*parole*)」、ジャン＝リュック・マリオンの「贈与 (*don*)」、ジャン・イヴ＝ラコストの「典礼 (*liturgie*)」がその例となる。三つ目は、出来事をなす能力自体を破壊するものであり、これを私たちは外－現象的なもの (*l'extra-phénoménal*) と名づける。実際、「現象－外 (Hors phénomène)」とは、外傷 (*trauma*) によって露わにされて表に出される構造のことであり、そこでは出来事の「衝撃 (*choc*)」によって、現象を現象化させる主体 (我) と現象化される地平 (世界) とが同時に破壊される。危機においては、主体は二重の意味で« Hors je(u) »となる。すなわち主体は、自己の外 (*hors je*) に置かれると同時に、作動し進展していく場や世界の外 (*hors jeu*) に置かれるのである。

2. 辰砂 (Le Cinabre)

まさにイマヌエル・カントは、『純粋理性批判』で「辰砂 (*cinabre*)」についての仮説を口にするとき、このことを見てとっていた。すなわち、もし赤色、より正確には朱色である「辰

砂」が「あるときは赤く、あるときは黒く」現れ、人間が「あるときは一つの動物に、あるときは別の動物に変身」し、さらには大地が「あるときは作物に、あるときは氷雪に覆われる」ならば、経験を形づくる諸能力（カントが超越論的なものと呼ぶもの）自体が消滅させられてしまう、というのである。何かによって私が破壊され、「生きる屍(mort vivant)」あるいは「生き残り (survivant)」として生きるまでになったとしたら、私が世界の内で主体として在る能力、世界の内で生きる能力までも失うこともありえるだろう。そうなると世界は« im-monde »なものとなる。この表現は、私が世界を拒絶し嫌悪するという通常の意味だけでなく、私が世界をなす能力を失ってしまったことを意味するのである。

3. 最悪 (Le Pire)

実際、最悪というのは、何かさらに悪いこと（例えば病気や戦争など）がなお自分の身に起こりうるということではなく、私の苦しむ能力も出来事をなす能力も消滅させられたことによって、より悪いことも善いことも到来しえなくなるという事態を意味する（例えば、シャルロット・デルボが『誰も戻らない』の中で記しているアウシュヴィッツ体験のように）。「病気、別離、子どもの死、自然災害、パンデミック」（「現象一外」の五つの典型例）など、受け入れることのできない出来事が「私に降りかかる（« me tombe dessus »）」とき、その衝撃はあまりにも大きく、私はそこから立ち直ることができない。それにもかかわらず、そこに私は、死ぬはずであった、あるいは死んでいたかもしれないのになお生きている自分を確かめるのである。

4. 思考不可能なもの (L'impensable)

ある出来事がこの意味で思考不可能となるのは、「もっとも思考を促すのは、私たちがまだ思考していないということ」（ハイデガー）だからではない。すべては思考されうる、あるいは思考されるべきであり、さらには思考可能であるべきだと信じ、そう語るだけでは不十分である。真に思考不可能なものとは、言葉遊びを交えて言うならば、« dé-penser »という事態である。それは、富を浪費するという意味ではなく、なぜかもしかにしてかも分からぬままに突然自分に降りかかる外傷に直面し、思考する能力の全てを失ってしまうことを意味する。思考不可能なものは、私を超えるのではなく、私を破壊する。私たちはつねに「現れ (apparition)」（現象学）や「解釈 (interprétation)」（解釈学）へと向かいがちであるので、存在するものを語ろうとして、つねに明白さや意味を求める。しかし、無意味とは、単に「意味の反対」ではなく、厳密に言えば、「意味の外 (hors-sens)」なのである。

5. 散在する思考 (La pensée épandue)

「散在する身体」(『散在する身体の倫理 (*Ethique du corps épandu*)』) に面したところで、「散在する思考」(『現象－外(*Hors phénomène*)』) が生じる。「わたしの思いは、あなたたちの思いとは異なる」(イザヤ書 55 章 8 節)。この預言者イザヤの言葉は、私の諸々の思考が他所から来ることを神学的に示しているだけでなく、同時に哲学的にも——今度は「現象－外性 (*l'extra-phénoménalité*)」の枠組みにおいて——、私が自分自身のものではなく、決して自分自身のものになりえない諸々の思考を発見すること、むしろそうした思考が私のうちに生じてくることを示している。病における身体は、もはや「自己の身体(*corps propre*)」とは言えず、むしろ「自己のものでない身体(*corps impropre*)」とならざるをえない(私の「病める身体」は決して真に自分のものとはえないものだろう)。それと同様に、外傷が私に取り憑き、いかなる他者性も入り込めなくするとき(子どもの死の場合のように)、私のプシケ(*psyché*) はもはや私自身のものではない。「何かが考えている」とニーチェは言い、「私は思考されている」とアルチュール・ランボーは語り、「私の思考はあらゆる段階で私を見捨てる」とアントナン・アルトーは打ち明けた。「非我(*non moi*)」が自我のうちに侵入し、もはや私は「私」とも「自己」とも言えなくなるのである。

6. 危機とカオス (La crise et le chaos)

危機とは、もはやここにいなかったかもしれない、あるいはいるはずではなかった自分が、なおも現に存在していることへの驚きを示している。実際、死への不安——すなわち、死を見据えつつ、生の只中で自らの実存の意味を問い続けること(ハイデガー)——よりもさらに過酷なのは、死者のように、生き残りのように現存在へと回帰してくる不眠(*insomnie*)である(レヴィナス)。そこで私は、無に呑み込まれて消し去られるはずであった自分がなぜなおも現に存在しているのか、と問う。危機とは、少なくとも自己にとっては、倒され、死に、消え去っていたはずの自分が、なおも立っていることの確認である。そこにあるのは一種の「混沌」であるが、単に「深淵からの開け」(ハイデガーによるヘシオドスの再解釈)ではなく、「混合」、「充満」、「粉碎されたもの」から始まる開け(ニーチェによるアナクサゴラスの再解釈)であって、これによって私は、自らの身体においても観念においても、自己自身に侵略されうるものとなる。「私は私自身にとって重荷である (*oneri mihi sum*)」——危機のときほど、この聖アウグスティヌスの言葉が真実である場合はないのである。

7. 復元力より揚力と抑制力 (Portance et contenance, plutôt que résilience)

それゆえここで肝心なのは、「復元力」(この語は今日濫用されすぎているように見える)ではない。この言葉は、あたかも危機から抜け出せるとつねに信じていなければならないかのように思わせる。もはや私自身によって閉塞された現存在以外にはいかなる地平も見えない危機や外傷というこの瞬間に、あたかも身を置いていないかのように思わせる。ここでは「復元力」ではなく(この語はすべてのスポーツ選手たちの、また時には諸国家の規範めいたものになってしまった)、「揚力 (portance)」(自らの外傷へと降りていけずに、外傷に担われているかのようにその上に浮かんでいること)と「抑制力 (contenance)」(破裂してしまわないように限界内に身を保つこと)について語ることにしよう。諸々の「外傷 (traumatismes)」は、私たちのうちに «traumatismes» (穴 (trou) を用いたラカンの言葉遊び) を作り出す。私たちの生とは張られたキャンパスのようなもので、外傷が突然降りかかるとき、そこに穴が開く。私たちは、「穴の周りを回る」ことはできても、決してその「穴の中に降りていく」ことはできない。穴の中に降りていくと、自分自身が破裂してしまいかねないからである。

8. 自己自身に対して他であること (Autre à soi-même)

したがって、危機における「衝撃」とは、実を言えばいつもずっと私たちのうちにあった「亀裂 (fêlure)」を露わにするものなのであるが(ドゥルーズ)、それによって、私たちはもはや「同じ」ではなく、また二度と「同じ」にはなれなくなる。スピノザの『エチカ』のうちに(アルツハイマー病に襲われた)詩人ルイス・デ・ゴンゴラを置いてみた場合のように、私たちには、極度の衝撃のために「本性」ないしは「実体」が変化し、もはや自分で自分を認識できず、他人からも認識されなくなるということが起こりうる。もはやフッサールのいう「他の自我」(alter ego)や「自我とは他の者」(ego alter)でもなければ、リクールのいう「他者としての自己自身」でもない。危機の場合に私たちが担うような、「自己に対して異他なるもの (étranger à soi)」と化した「自己自身に対する他者」である。「私に対する他者」として、私の自我が「他者」なのである。このことは、カフカの『変身』において、ゴキブリと化したグレゴール・ザムザの姿が私たちに教えてくれることである。

9. 超変容 (L'hyper-transformation)

こうして危機は、過去へと戻ってかつての自己同一性を求めさせるよりもむしろ、私たちを「超変容」へと呼び出し、私たちにつねに変容を被り続ける存在として自らを認識させるものとなる。実存するとは、同じままであり続けることではなく、異なるものとなること

を受け入れることである。だとすれば、諸々の精神病（メランコリー、躁病、統合失調症）についても、もはや単に健康という観点からとらえるのではなく、むしろ実存することの他なる諸様式としてとらえねばならなくなるだろう。あらかじめ定められた計画があるかのように、「汝がそれであるところのものとなれ（deviens qui tu es）」（ピンダロス）というのではなく、「汝がなりつつあるものであれ（sois qui tu deviens）」（ニーチェ）といわねばならない。私たちの生成は決して定められていないからである。危機の思想の新たな命法は、もはや「現れがあればあるほど存在がある」（ハイデガー）でも、「還元があればあるほど与えがある」（マリオン）でもなく、「例外（exception）があればあるほど変容がある」となるだろう。

10. 二つの孤独のあいだの絆としての愛（L'amour comme le lien entre deux solitudes）

危機や外傷は、私たち一人ひとりのうちには、私たちが知らない、そして決して知ることのない「孤独の核（noyau de solitude）」（traumatisme というよりもむしろ troumatisme）があることを露わにする。これは他者においても同じである。愛しあうとは、すべてを共有しようとするのではなく、私たちのそれぞれのうちに〈共有しえないもの（impartageable）〉があることを認めることである。私たちはまず、たがいの伝達可能性によって愛し合うのではなく、たがいに共通する伝達不可能性によって愛し合うのである。私たちの「孤独の核」は、認識しえないと同時に侵害しえないものであり、それゆえ私たちの人格のもっとも強い部分を内包している。これこそが、愛するという行為の最良の名である「絆（lien）」（ライブニッツとブロンデルのいう紐帯（vinculum））をなすものである。『若き詩人への手紙』におけるリルケの言葉を繰り返すなら、「愛とは二つの孤独がたがいに引き寄せられ、たがいを祝する行為」なのである。